明治四十一年四月五日發行（毎月一回二十日發行本號は臨時五日發行）

April 5th 1908.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 191.

# 大日本蠶絲會報

臨時增刊第百九拾壹號

## 本號目次

●予の希望　會頭男爵　松平正直
●蠶絲家に發奮を望む　學絲委員　松永伍作
●蠶種の話　學務委員　土屋泰
●何故に入會を勸むるか　理事　吉池慶正
●生絲貿易の話　農務委員　今西直次郎
●蠶絲業の經營に就て　理事　本多岩次郎
●工場主と慈惠的施設　理事 法學博士　桑田熊藏
●生絲より織物　男爵　澁澤榮一
●蠶絲業に關する經濟組織に就て　監事　加賀山辰四郎
●炭酸瓦斯と換氣と　農學士　川島勝次郎
●一反歩の收桑一千二百貫　學務委員　練木喜三
●既往一年間の生絲貿易
●四十年度の蠶界小史
●本年の養蠶

TOKYO.
The Association;
No. 2 Mitoshirocho, Sanebome, Kanda, Japan.

明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

# 年報に就て

本會の會員となられた諸君には年一回年報なるものを發刊して遊上る御約束でありますから茲に本會年報の臨時增刊として特に七萬部の年報を發し敢て親愛なる會員諸君の左右に呈し併て普く公私團體に寄贈する次第であります、就ては月々會報を手にせらるゝ方は何もかも御承知のことでありますけれどもさうでない方は未だ御承知でないことゝ存じますから左に少しく會報に就て述ぶることに致しませう

一體本會は蠶絲業の改善發達を計るを以て其主義本領とするのでありまして其目的の實徹に努むべく各種の方面に全力を傾注して働いて居るのですが其働きの一つとして毎月一回月刊雜誌即ち『大日本蠶絲會報』なるものを發行して居ります本誌は去明治二十五年に於て始めて斯業の革命兒として產聲をあげたのであります爾來滿を閲すること有七、號を重ねること一百九十其印刷部數は毎月二萬餘を以て算するのであります、而かも記事の穩健にして着實なるは他の雜誌に於て多其比を見ざる處でありまして專心一意讀者諸君の爲に編むる文字は皆之好個の資料たらざるはなく其に當業者の指針となり羅針盤となるべきものは本誌であると自信し有ゆる實業雜誌中のオーソリチーを以て自ら許すのであります斯して本誌は現在內地に一萬九千餘の愛讀者を有する計りでなく伊佛其他の海外諸國にも亦五百餘の愛讀者を有するのでありまして其れさへあるに月々天聽に供へ奉るの光榮を擔ふて居るのであります之で本誌は愈々其責任の重きを悟り愛讀者諸君の援助と本會の奬奮とに依り多々益々之が改良を期し進み行く世と共に漸次其面目を改むる積りでありますから會員諸君は勿論斯業の熱心家は進んで本誌の愛讀者となり斯業の改善發達に盡瘁せられたいのであります。終りに年報は最も趣味と實益とに富めるものを編纂して會員諸君の前に提供したいと思つたのですが何分本會諸般の設備未だ整はずして其意を盡すことか出來ませぬのは其だ遺憾とする處であります會員諸君幸に之を諒せられたい

大日本蠶絲會總裁伏見宮貞愛親王殿下

L. A. I. le Prince Fushimi, Président de notre Association.

臨時増刊

# 大日本蠶絲會報

第百九十壹號

## 第三回總會に就て

會員 松平正直

櫻花爛漫として綺麗地を埋ぜんとする畸本邦輸出品中の巨臂たる蠶絲の改善發達を目的とする大日本蠶絲會は福島支會の勉請に由り四月二十日を以て其第三回總會を福島市に開かんとす固と福島の地や我蠶業史上須臾も忘るべからざるの地にして夙に本邦蠶業界に鉛し たるの功績赤煽る著しきものあり然るに今回東北六縣聯合共進會の同市に開設せらるゝ機とし 總裁殿下台臨の下に全國の蠶絲業關係者相會平素の主張抱負を披瀝し得るは實に無上の光榮とする處にして同縣蠶絲業の爲には鉛上更に花を添ふるものならずんばあらず詩に曰く花正濃時人正愁と時や春風淡々として花正に濃かなるべしと雖も續つて我蠶絲業界の大勢を觀れば當業者大に發憤奮興を要する秋なり驚くは國運を憂ひ産を愛する天下の有志諸君百忙中の一間を割き隨櫻來會せられんことを

蠶絲は本邦重要の物産である計りでなく農家の副業として大切なることは他に其類例を求むることが出來ないのであります、故に我くも上皇室に於ても深く斯業に重きを置かせ給ひ 皇太后御在世の又も 皇太子紀殿下にも親しく御飼育遊ばさるべしとのことで有ます、父我總裁伏見宮殿下には常に斯業に深く御心を注がせ給ひ、客年遺英大使として渡米に御成遊ばされました際の知き、到處蠶絲に御下問あらせられ殊に我天然絹絲の實況を詳に御聴取遊ばされ、絹絲に就て御注意を怠り給はず、之に關する見本さへ御持歸り遊ばされました此種の御思召に對しては只感泣の外ないのであるから吾々國民は其本分として銃後の産業の振興を計り以て此御聖旨に報い奉らねばなりませぬ、我蠶絲會員諸君が多年之が改善進歩に全力を注ぎ會員諸君が蔵うて之に從事せらるゝのも寔に所以あると存じます幸に上下一致の熱誠は斯業をして長足の進歩を爲さしめ、今から二十年前即ち明治二十一二年頃の生絲輸出額は僅に一千九百二十八萬餘圓に過ぎなかつたに反し、明治四十年には其輸出額は一億一千六百十一萬五千九百九十圓に達し、殆ど六倍餘の盛況を示したのであります、吾々は國家の爲に大に之を賀し、猶前途の益々盛んならんを願る者であります、併し客秋來我生絲貿易は兎角不振の狀態に陥り、一時一千三百四拾貫餘を數せし絲價、昨今八百圓臺に下落し、年末より一月に渉りて一時横濱相場は四萬餘俵の堆積を以て算し、之が爲に製絲家の中には大分損害を受けられた方もあり旁々夫れが養蠶家の人氣上に及ぼし、進んで蠶兒を飼育するの勇氣もないなどゝ云て居る人もある樣に聞いて居りますが、之は如何にも早計で最も有望と云はれて居る農業でさへ年に豊凶あるを免れない、物は何でも十年平均で是非を決するとの出來る者とは存ませぬ、然るに今日生絲市場の振はないのは生産過多の爲であります一年や二年で是非を決するとの出來る者とは存ませぬ、然るに今日生絲市場の振はないのは生産過多の爲ではないか、絹布に對する嗜好心の變遷した爲ではないかと色々悲觀して居る者も在るやうだが、之は全く餘計な心配であります、往年一般に必要品と認められ、之が用途は各方面に擴張せらるゝやうになつたでは有ませぬか、今日本邦の産繭高三百四十餘萬石は、外ダボンの原料に供し、悉く其蒸用を盡すとが出來であらうか、家内の電燈線やヤヒに迄一の装飾として殆ど無限に使用せらるゝ處より考へれば、生絲の産額は如何に多量に上るも、販路に選支のあらう憂は

ない、然れば客秋來の生絲賣買の不振は何の爲であるかと言ふに、是は全く米國の恐慌に因てあるまじき事なれども、歐洲の不況と共に米國の經濟界も遠からず健全の狀態に復するであらうと思はれるから、夫と同時に一時代解して居つた各種の需用を喚び起し活氣を帶び、從て絹絲の大人氣となるは眼前に迫つてゐる。

現に昨年の輸出は、其後漸次に減少して來たとは言へども、なほ四萬餘俵に達し、其中の大部分は米國に向て輸出せられたるものである。

今年は、米國の高下で來年を伸縮せんが如く、やはり米國の動向は實に同様に關係する處で、別に繭糸經營するに就きては、なほ多くの問題多からんと察するが、此本年の儲けは製糸業を繼續し、又は新たに製糸業を開始せんとする者に對して、輸出の不振は、同じく興味を與へるものなるべしと言ふ。

## 蠶業家に發奮を望む

學士會員
京都蠶業講習所長
松永伍作

昨秋以來絲價は次第に下落して遂に千圓臺を踏み切り、昨今にては八百圓臺にまで成り下つた、爲めに大小の製絲家はそれ相應に損失を蒙むらないものはなく中には一敗地に塗れて亦起つ能はざるまでに陥つたものもある。

蠶種製造家も亦同じやうな有様で、昨春種のよく賣れた處から、うんと蠶種を造るに絲價の暴落により養蠶家が掛立を手控へたから、之れ亦多く賣れ殘りが出來て、此頃非常に困つて居るものが多いやうである。

養蠶家は幸にして昨年は高く繭を賣つたが、本年は非常に繭が安いであらうと考へて成るべく手控へする傾向がある。

しかるにワラ〳〵斯業界の前途を考ふるに決して悲觀すべきでなく、近き將來には必ず一層の刺激があるやうに見える。即ち絲價の下落は絹絲なるものが人に困難せしめるよりも起つて供給高の增加が消費用增進の割合より遙に大となつたと云ふ譯でもなく、消費絹絲の大敵が崩れ之に場所を譲るべきよりも起つたと云ふ譯でもなく、世界に於ける

に、殘念の事に思ふ、本來を云へは現今の蠶種の代價は不合理に廉價である、斯く云ふと無闇に絹家の肩のみを持つ樣であるが、決して左樣ではない、蠶の割合から較べて見れば、不合理の所以が明らかに成せられ、試に明治二十年頃の物價と現今の物價とを比較して御覽なさい、思ひ半ばに過ぎるであらうと、其筋で調査したる物價表にも、私共が日用品に就て記憶する處に依るも明治二十年頃の物價を一とすれば、此頃の物價は概ね二以上になつて居ります、即ち一圓であつた者が二圓以上になつて居る、又蠶種と密接の關係のある生糸、和場を見ても、明治二十年に於ける繭の平均價額は百匁に付六百貳拾壹圓三十年は八百〇四圓同四十年は千二百五十五圓である、二倍以上になつて居る、然るに蠶種の價格は如何であるか、殆んど二十年前と八百錢、一枚蠶種一枚の價は壹圓から壹圓五拾錢、一枚分の價は貳錢五厘から參錢であつた、物價が二倍に騰貴したるに拘らず、蠶種の價のみ二十年前と變らぬと云ふのは道理に當らぬではないか、是私が不合理に廉價なりと云ふ所以である、或は曰はん昔は蠶家が不當の利益を貪つたのではないかと、成る程昔の蠶家が一般に上等の生活をして居つた點から見ても、普通蠶家に比して利潤が多かつた樣に思はるゝが、現今の相場では普通蠶家程も利益のない仕事は誰もする筈はないと言ふかも知れぬが、農業者が久しく馴れた業務を轉ずる困難なることは實に思ひの外である、故に利益がないからと云つて直に轉業するものは無いが、何れの方面でか生産費を省いて利益の增進を圖りて其業務を維持に努むるのである、有體に云へば薄利なれば敬遠して粗製にしたのは、勢ひ止むを得ないのである、何れの仕事でも利潤を改良せずして只徒に無理の踏倒しである、ところが私は斯く信ずる、此際蠶種の改良を圖るには先づ第一に養蠶家との關係一今一層親しくして、誠實にお互の業務を保護すると云ふ考へになつて實はねばならぬ、否ら蠶の將來は頗る有望視されて何程日に改良を加へられ、又價格の變動の激しいものは投機的に流れ易く、之に從事する當業者は生産費を以て改良せよとか、單に蠶種製造家に親切が薄くなりて徒に利益を貪ぼるとか云ふ樣なる不公平を增すことは明かである、蠶種

ぬ、西郷じ之れないのであらふ。

本會の目的は、蠶絲業の改善を期する為の機關として、此等は熟に進歩を企圖せなければならぬことは申すまでもないが、國是である名士と共に國家の興隆を表彰して以て之を不朽に傳へ、他の勸奬と爲す所大日本蠶絲業會なる者は、蠶絲業に從事する勞働者に對して多年忠實に精勤せる者を選擇して之を褒賞することに努めて、位置に高まる、茲に於て其人は此物産の隆昌に伴ふて富國の勇を揚ふと云ふ、謂て

今や我國の物産は到底諸國に於ては獲難しとする程の秩序である。

本會は蠶絲業に從事する勞働者に對して多々益々生産を增加する蠶絲の販路を擴張せんが爲沢く海外に紹介することを圖る。

本會は蠶絲業上に於ける品評會に應じて蠶業上に於ける品評會に開設し其出品の優劣を批判し以て相互流通の機分を爲す。

本會は蠶絲業の改善を期する蠶絲の販路を擴張せんが爲沢く海外に紹介することを圖る。

本會は蠶絲業に於ける法規施設の他其失を講究し政府に當業者の間に介在して事情の疎通を

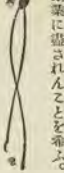
生絲は消費の第北緯的少量なる前表に示すが如く三十九年四十年と遞次其の輸入額を統計的に増加する傾きになつて、其の需用の途益々擴大するは必然の勢なるべし、濠太利、露西亞、獨逸、澳太利、瑞西、伯國等に對しても之れが需用の増大と共に本邦生絲を消費せざるべからざる現象なり、假りに全日本國をして悉く桑園に化せしめ養蠶をなし、生産の産額を挙げ世界に於ける年々見出だしつゝある無限の需要量は到底滿足すべき筈なし、故に今後我が生産の産額が如何に増殖せらるゝも供給の需要に過ぎして販路の梗塞せらるゝが如き憂は決してあらざるべく、否寧ろ其の産額の増殖すること愈〻世界の生絲市場を左右すべき勢力を扶殖するに一度び恐慌の起るや、其の波動を直ちに蚕糸界に及ぼし、其の破綻者を出だしたるのみならず、一般の人心を動搖せしめ、一種の恐慌を惹起せしめ、少も、少なからず、一時に於ける生産の減退を來すべし、然りと雖も、永遠の期間に至るには、之が常態に復するは要するなるべし、今、後に於ける生産の減退を來すべき事あれば、實に本邦生絲業を阻碍する由々しき一大事にして其の原因を失したるものと出せしんとする二、三希望の要點を述べ參考に供せんと欲す

近時、時に、續いて前項の安きを把握し、蠶種の繁立を減じ、其だしきは桑園の施肥をも節減するの向ありと雖も、若し果して其の言の如くなれば實に予輩の恐れざるべからず、年々の如き相場は、製糸者の生絲業界相場に靜ひたる一時的に望むことは能はざるべし、之れを以て標準とすれば、既往の相場に比し、一貫目内外

んとするには、其の間種々なる情況の伸縮を考へて、最も適当なる時期に於て播種するに就て、時機を失はざる様に注意すべきは勿論である。

# 蠶絲業の經營に就て

農學士 本多岩次郎



蠶絲業の發達は、我が國家財源に大關係を有し最も重要なるものであることは我が蠶絲業の經營上に於て最も肝要なることとなる。其の給桑法は地方に依り又は人に依りては全く桑園を有せずして桑葉を買入れしむる場合もあり、其の部分は桑園を有する者があるが是れは桑葉を必ず自己の桑園に育成して使用するを要するものと、一つであるが是れも又種類により或は之れが製造法の適否に依り大選定に注意すべきものであるから其の分量の現状は未だ一般養蠶上に用意すべき最も重要なる

ること勤勉減質其結果事業は進歩し經費は節約すること益々甚しく上の處決し遠く個人組織よりも高き機械を使用して商業を得べく加之組織に於ける恐れなきに非ず即ち製絲業は會社組織と個人組織との方が利益である併しながら會社組織として有利の點も少なくない者し夫れ會社組織として斯業の經營を一任し素人村人を挙げ以て事業の經營を一任し素人村人を挙げ以て事業の經營を一任し素人村人を挙げ以て事

糸繭の揚返及煮繭試験方法説明書の作製に当り特に本試験を担当せられたる農学士川島勝次郎氏に対し深く感謝の意を表す

## 炭酸瓦斯と換氣

農學士　川島勝次郎

比較的簡単で安価な換氣法を行ふと云ふ事は室内に於て人間の呼吸する炭酸瓦斯（約五立メートル）の量に於て五倍の容量の空気を入れ百分の一の炭酸瓦斯を含ませる事である。今若し室内の容積を一万立方尺とすれば一時間に約一立方尺の炭酸瓦斯を生ずるものとすれば室内の空気は一時間に約一立方尺の新鮮な空気を入れ百分の一の炭酸瓦斯を含ませる事である。今若し室内の容積を一万立方尺（約五立メートル）の容量に於て五倍の容量の空気を入れ百分の一の炭酸瓦斯を含ませる事である。

$$V = \frac{0.0005}{1-0.0005} = 0.0005$$

$$V = \frac{0.0005}{1-0.0005} = 0.0005$$

即ち室内に於て此の容積の炭酸瓦斯を一時間内に発生する容積を $V$ とすれば

生絲の輸出は貿表の如くであります が之に對する繭糸類の生産額はどれ位であるかと申しますれば江明治二十八年より同三十七年迄の産額に次の如くであります。

## 蠶絲類産額累年對照表

| 年 | 次 | 生 | 繭 | 其 | 他 | 合 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 三十年 | | 一、五三七、五六一 | | 六二、九三七五 | | 二、一六六、九三六 | |
| 三十一年 | | 一、四七七、七四七 | | 八五五、一一八 | | 二、一三四、八六五 | |
| 三十二年 | | 一、七五四、二四二 | | 七六、二四〇一 | | 二、五五一、六四三 | |
| 三十三年 | | 一、七五五、七五一 | | 七三、八九〇五 | | 二、四九四、六五六 | |
| 三十四年 | | 一、七五〇、四一七 | | 七一一、四八五 | | 二、四六六、一九一二 | |
| 三十五年 | | 一、七九一、九二八 | | 七六五、二五〇 | | 二、五五八、一七八 | |
| 三十六年 | | 一、八三六、五九二 | | 七五五、一八〇 | | 二、五九一、一七七二 | |
| 三十七年 | | 一、八六〇、七二〇 | | 七九六、二五二 | | 二、六五六、九七二 | |
| 三十八年 | | 一、九四九、一二〇 | | 六五七、〇〇四 | | 二、六〇六、一二四 | |
| 三十九年 | | 二、一九〇、三三二 | | 七二七、一七七 | | 二、九一七、五〇九 | |

四十一蠶業界小史

明治三十九年度經費決算の件、同四十年度追加豫算の件、功績表彰の件、製絲營業組織に關する件等を評議したり。

一月十八日　本會に既設東四蠶業講習所を補强して蠶當の場所に充ぶるか然らざれば他に獨立的機關を設備し以て双秋蠶に關する鼎立技術を養生し併せて夏秋蠶に則する種類の解決に勉むる為基礎の急なりとして双秋蠶講習所設置の建議を松岡農相に提出したり。

一月二十七日　本會に第二回總會及生絲取扱一覽圖廻覽の觀覽會を麻布東京市麹町區西山下町郵便會館に於て館開したり、當日總裁殿下臨あらせられ優渥なる令旨を賜りたり其務の報告は評議員の組織認定を為し第四期功績表彰を行ふ松岡閣谷松田牧野各大臣吉原、若槻、和田、澤柳の各次官正親町、高見小路の兩伯爵、樋口、澤柳の各次官正親町、高見小路の兩伯爵、樋口、鍋越、青山の各男爵始め其他朝野の要人及會員の來會したる人の無慮七百餘名に上れる盛會を極む、本會に一同に記念祝盃者を贈呈し、丸一の大幕樂柳川一統壽の目次手品、幽々亭柳泉の板畫等の餘興あり。

一月二十九日　本會富山支會に同絲繭蠶組合評議員に於て第二回總會を開きたり。

二月三日　本會評議支會に同絲講事業に於て、盛大なる發會式を擧行したり。

二月十二日　本會群馬縣下に於ける會員の大會を開き、農商務大使として子爵幣原喜十郎外數名の出席せり。

二月十五日　道奥大使として子爵幣原喜十郎外數名の出席せり。

二月十六日　本會宮城支會に於て第二回高等蠶業講習會を開きたり。

二月二十七日　群馬縣桐生市の製絲組織組合に於て創立總會を開きたり。

四月一日　農商務省は蠶絲地改良國庫補助費及他國産種に關する調査の為の出張を命じたり。

四月二日　本會富山支會は同絲繭蠶組合に於て發會式を擧行したり。

四月三日　上州繭糸社創立二十週年の大祝賀會を擧行したり。

四月十五日　本會三重支會は同絲會講事業に於て、第七回總會を開きたり。

四月十七日　上州南三社の蠶業改良に關する諮問案を提出したり。

氏は來國に於ける生絲賣込及組織物同盟の為め、本日安藤丸に招待饗宴の途につけり。

四月二十一日　本會は上野國養蚕會に於、同、原屋及上京中の地方官を招待し午餐を饗したり、席上從農農相に大日本蠶絲會は多年蠶業の發達に貢献せり、實益保全の發育を為すに所在あるとて感謝を述べたり、次に孫內相は國家經濟に被接の關係ある蠶絲業の中堅たる大日本蠶絲會の如きは、尤も必要の機關なり、場方長官各位に於ても本會種紙の為めに盡力ありたしとの挨拶ありたり。

一月十八日　本會評議員工藤雲路氏外五名の代議士より國立夏秋蠶講習所の設置方を新に提出せられたり。

一月十七日　本會評議員會に於て神田錦町三河屋に於て開き明治三十九年度經費決算の件、同四十年度追加豫算の件、功績表彰の件、製絲營業組織に關する件等を評議したり。

一月十六日　本會大分支會は同絲繭會講事業に於て第二回總會を開きたり。

一月十五日　本會評議員會に於て第七回高等蠶業講習會の設置方を新に提出せられたり。

一月十四日　本會評議員會に於て神田錦町三河屋に於て開き明治三十九年度追加豫算の件、同四十年度追加豫算の件、功績表彰の件、製絲營業組織に關する件等を評議したり。

一月十六日　本會大分支會は同絲繭會講事業に於て第二回總會を開きたり。

一月十五日　本會評議員工藤雲路氏外五名の代議士より國立夏秋蠶講習所の設置方を新に提出せられたり。

一月十四日　本會評議員會に於て神田錦町三河屋に於て開き明治三十九年度追加豫算の件、同四十年度追加豫算の件、功績表彰の件、製絲營業組織に關する件等を評議したり。

一月十七日　本會評議員會に於て神田錦町三河屋に於て開き明治三十九年度追加豫算の件、同四十年度追加豫算の件、功績表彰の件、製絲營業組織に關する件等を評議したり。

一月十六日　本會大分支會は同絲繭會講事業に於て第二回總會を開きたり。

一月十五日　本會評議員會に於て第七回高等蠶業講習會

## 蠶産額十箇年比較表

| 年次 | 繭類 | 絹類 | 蚕種 | 蚕國 | 蚕國 | 蚕國

## 事務所移轉豫告

本會の會務は事業の擴張に伴ひ從來の事務所にては狹隘を告ぐるに至りたるを以て新に家屋を購入致し目下改築中に有之本月中には工事終了の見込に付き來月中旬頃には左記の處へ移轉可致候間此段會員諸君に謹告致候也

明治四十一年四月

大日本蠶絲會

神田區錦町三丁目拾八番地

## 會員諸君に告ぐ

福島支會奥羽六縣聯合共進會に際し特に來觀せらるゝ會員諸君の爲めに同會所在地中最も眺望絶佳なる阿武隈河畔を選み會員優待所を設置し同會開會中則ち四月十一日より五月二十日迄會員諸君の隨意休憩の便に供し茶菓の饗應を致候筈に付御來會の諸君は心ず本會所定の徽章を佩用相成度候樣致度佩用無之ときは或は御斷申上候場合も可有之と被考候間此段御通知申上候也

明治四十一年四月

大日本蠶絲會


◉本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢　本號に限り金拾錢

明治四十一年四月五日印刷發行

編輯兼發行人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　小池市松

印刷人　東京市神田區美土代町三丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　三秀舍活版所

東京市神田區美土代町三丁目二番地

發行所　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

禁轉載